

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

## 「鵬程万里」第三回

著者 中川由香

今年も暑熱の厳しい夏でした。エアコンも冷蔵庫も無い明治期の方々は、どのように過ごされていたのでしょうか。明治三十八年「文芸倶楽部」で、夏の過ごし方についてのインタビューで、圭介は次のように答えています。

「山より海辺の方がよい、これは海風が肌に触れて爽快に感じるからだ。食べ物は魚の洗い膾、イチゴ、豆腐が好きである。旅行中には唐宋詩醇、英国仏国人の小説、生命始源の類の本を靴に入れる。夏の遊戯としては、水浴、遊泳、水辺奔走を楽しむ」

夏の過ごし方一つを見ても、すでに七十歳の年齢に達した圭介の趣味の多彩さ、活動の活発さが見て取れます。夏でも食べやすい魚の膾と豆腐など良質の蛋白質を、夏イチゴからビタミンを取って、体を健康やかに保つ。そして旅行に出かけ、水泳をし、時には浜辺を走る。靴には、古今東西の詩集や小説、科学書の類がいつもある。夏バテとは縁のない、充実した生活の様相が伺えます。

偉人と呼ばれる人間の底の深さは、寸暇惜しまず普段の趣味一つ一つを楽しむことにあるのではないかと考えられます。圭介の趣味は多彩にして、蘊奥が究められていました。漢詩や和歌は詩人の粹に入ります。圭介は、自然の森羅万象を愛し、人間の心の機微を繊細な達筆で描いています。個人の詩

集を出版した事はないようですが、戊辰戦争日記の「南柯紀行」など各日記に収録したり書画に認めたリした自作の数々の詩は、詩集を編んで余りあります。上郡町の願榮寺や郷土資料館で複数回開催された大鳥圭介書画展で目にされた方も多いでしょう。

また、圭介は古書画を愛し、対青軒の秋の七草、介石の山水、柳里恭の松に蔦、などの幅を愛玩しました。一方で世相に皮肉を込めた狂歌を作っては、催しにおいて笑いを取ったりもしています。

また、幼少からお芝居が好きでした。適塾では役者の真似をして朝友人を起こし、周囲を笑わせていました。相撲を見るのも好きで、坪井塾の頃や明治になっても吉田清成と共に度々観戦していました。商法講習所教師の米国人ホイットニー一家に招かれたパーティでは、圭介はおかめの面を被って踊りを披露していました。圭介は、周りを賑やかにするエンターテイナーでもあります。

圭介はすこぶる健啖家でした。斗尺を辞さない酒好きでした。禁酒同盟の安藤太郎などは酒を止めさせようしましたが、圭介は「小僧何を言うか」と相手にしませんでした。ただ飲まれるほうではなく、酒を飲むと女性も近づけず、漢詩を作って何回も吟じて過ごしたと語られます。食べ物、淡白な野菜、水の良い神戸の豆腐、蟹・蝦を好んでいました。こ

うした嗜好は、七十九歳と当時では長寿を生き肉体に寄与したことでしょう。

圭介は、剣術や武術の技を競って嗜んだ当時の人間には珍しく、武道の経験はありませんでした。しかし乗馬が好きで、街中や山野を駆けています。また非常に健脚でした。道なき山々、谷、崖を越え、一日四十キロメートル以上も歩いていきます。趣味の余技から、職務に必要な実質的な体力を有していたと言えるでしょう。

圭介の趣味は、特に珍しい奇を衒ったものではありません。ただ、それに付随する知識や技能が多分野で深められ、その集積と結合が、何よりの圭介の強烈な個性や能力に結びついたと言えます。例えば、漢詩を作るのは当時の人間にとって珍しいことではありません。しかし、洋学を学ぶ人間は、漢文の素養がなければ適切な国語に翻訳する事ができませんでした。圭介の詩文の趣味が、分かりやすく的確な訳文を作成し、結果洋学者として大成することに寄与した事は疑いありません。

また、趣味は人格を陶冶します。日英同盟立役者の外交官林董は「当世の軽薄な俗政治家とは全く異なり、詩を詠み歌を善くし、書も絶妙で、その高風清節は敬慕すべき一人物だ」と評しました。また海軍少将の本山漸は「大鳥さんは座禅はやらす解脱など唱えなかつたけれども、自ずから禅の境地にいた」と語ります。趣味がそうした人格を形成したのでしょう。圭介の人間としての裾野の広さと懐の深さは、我々に日常の過ごし方を振り返らせます。